



Title	調査報告のまとめ
Author(s)	小内, 透
Description	終章
Relation	現代アイヌの生活の歩みと意識の変容 : 2009年北海道アイヌ民族生活実態調査報告書. 小山透編著
Citation	北海道アイヌ民族生活実態調査報告 : Ainu Report, その2, 195-201
Issue Date	2012-03-31
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/48983">https://hdl.handle.net/2115/48983</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	AINUrep02_013.pdf



# 終章 調査報告のまとめ

小内 透

北海道大学大学院教育学研究院教授  
北海道大学アイヌ・先住民研究センター兼務教員

本報告書では、アイヌの人々の生活の歩みと意識の変容に関して、インタビュー調査の結果にもとづいて検討してきた。そこで、明らかになったことを改めて確認し、調査報告のまとめとする。

## 第1節 生活史の全体的特徴

第1部では、調査対象者の生活の歩みやアイヌ性について、世代、地域、性別の視点から検討した。

第1章から第3章の分析を通じていえるのは、世代の違いを基本とし、それに地域差や性別の違いが絡み合いながらアイヌの人々の間に多様性もたらされていたことである。それは、教育や職業生活といった生活や人生の基本に関わる一般的な側面と民族意識やアイヌ文化の実践というアイヌ民族に固有のアイヌ性の側面で見いだせた。

教育の面で見ると、農漁村（むかわ）より都市（札幌）の方が、また女性より男性の方が教育の達成度つまり学歴水準が高かった。しかも、世代が遡るほどその差は大きくなっていった。これは、アイヌの人々に固有の特徴ではなく、日本社会一般に当てはまる傾向である。ただし、世代・地域・性別にかかわらずなく、学歴水準は一般的水準と比べ、全体として低かった。この結果は、すでにわれわれが2008（平成20）年に行った量的調査の結果とも符合している。

職業生活についても、同様なことがいえる。都市の方が農漁村より職業の機会に恵まれていた。しかし、世代が下がるほど職種に違いがなくなり、雇用形態が不安定になっていた。ただし、男性と女性では、職業生活の意味が異なっていた。男性にとっては、経済的自立が自らの自信につながるのに対し、女性にとっては、結婚までの腰掛、家計補助のために稼ぐ手段であり、自分のアイデンティティを支えるものにはなっていなかった。ここでの特徴も日本社会一般に見いだせるものであった。

一方、アイヌの人々に固有の民族意識は、世代が下るに従って希薄になっていた。アイヌ政策への要望にも世代差が見られ、若い世代ではアイヌ民族を特別視し優遇する政策に否定的な傾向が見られた。都市と農漁村を比べると、農漁村の方が民族の権利回復に関わる事柄をアイヌ政策への要望としてあげる者が多かった。また、男性と比べ女性の方が、民族の権利回復などの一般的理想的な項目ではなく、子どもの教育費の援助を始めとする具体的な事柄を要望しがちであった。

その背後に、アイヌ文化への関わり方の違いが存在していた。世代が下がれば、アイヌ文化を日常生活の中で体験することは少なくなり、現時点でアイヌ文化を実践する割合も低下していた。また、男女の間で、現在携わっているアイヌ文化の違いが見られた。男性は、カムイノミなどの祭事、伝統的葬儀、先祖供養といった儀式・祭祀の分野、女性は踊り、歌、料理、刺繍、工芸といった芸能・生活文化的な分野に関わる傾向があった。

このように、同じアイヌの血を引いていたとしても、多様なアイヌ性が見いだせた。とくに、

世代による違いは大きく、若い人の中には、アイヌであることを知らされた時、「カッコいい」ととらえる感性をもつ者さえ現れるようになっていた。差別と偏見の中で、アイヌであることを自ら肯定できず、血を薄くし同化を志向していたかつての世代には考えられない現実が生まれるようになってきている。差別が相対的に少なくなり、アイヌ文化振興法以降、アイヌ文化の価値が見直されるようになったことが、その背景にあることは否定できない。アイヌ文化の価値の見直しは、現時点でアイヌ文化に携わっていない人も含めて、男女、世代、地域にかかわらず、多くの人たちがアイヌ文化に興味をもち、今後関わりたいと思う現実を生み出していた。

## 第2節 生活基盤としての階層と家族

第2部では、生活基盤としての階層と家族に焦点をしばって、調査対象者の特徴を掘り下げた。

まず、第4章で階層の形成過程と階層分化の要因を探求した。

その結果、青年層が置かれている厳しい状況がみえてきた。男女とも、個人の年収は著しく低い。教育達成としてはもっとも恵まれている世代であるものの、獲得した学歴が職業や収入に結びついていなかった。これに対し、男性壮年層、男性老年層では、学歴社会がある程度機能しており、相対的に高い教育を受けた者が、経済階層上でも上位に位置づけられていた。

女性の場合、階層を形成する上で、「結婚」の重要性が確認された。壮年層や老年層の女性にとって、自らの経済階層は夫の収入によって決まっており、出身家庭の経済状況や自らの教育達成などは、それほど重要な意味をもたなかった。これは、社会一般に見られる傾向である。

だが、アイヌ女性の場合、結婚にあたって、民族問題のもつ意味が大きくなる点に、独特な特徴が見いだされた。実際、壮年層、老年層においては、結婚の際にアイヌであることを取って隠すということが行われていた。これに対し、男性の場合は、階層形成と階層分化に関わって、民族的な問題はあまり顔を出さなかった。アイヌであることが階層形成に大きな影響を及ぼすのは、女性に限定されていた。

ただし、青年層の意見をみると、異性とのつきあいのなかで民族を意識する者は確実に減っていた。アイヌであることを伝えたら「逆に尊敬された」などと語る者もいた。青年層の世代以降、アイヌであることが階層形成に不利な影響を与えるようなことは、少なくなっていくように感じられた。

第5章では、家族の形成と再編について、検討した。

今回の調査で得られた4世代にわたる血筋のデータを分析したところ、1920年代以降戦時中の一時期を除いて、ほぼ一貫して和人と結婚が進んできたことがわかった。今回の対象者とその配偶者のうち、4世代までさかのぼってもアイヌの血筋だけの、いわば純血のアイヌの人は207人中7人しかいなかった。調査対象者の場合、いずれの世代でもアイヌ同士の結婚は少数派で、老年層を除けば、アイヌ同士の結婚は10%台しか存在していなかった。

かつては、和人と結婚には、アイヌの人々が持っている身体的特徴を目立たなくさせようとする、アイヌの人々自身の戦略があった。和人養子に関しても、捨て子を育てる人情深さと同時に、混血を進めようとする戦略が働いていた場合もあったようである。ただし、北海道に入植した和人の開拓者が、生活の厳しさゆえに、子どもを手放すことがあったという歴史的事実が、和人養子が生まれる背景として存在したことを忘れてはならない。

だが、アイヌの人々にとって、和人と結婚は軋轢をとまなうものでもあった。とくに世代が上の人の場合、差別と偏見により和人側の家族や親族から反対されることが多かった。結婚自体をなかなか認めてもらえないケースもあった。最近では、反対は少なくなってきたが、いまだに反対をおそれてアイヌであることを伝えずに結婚する場合もあるようである。

たとえば、和人と結婚しても、離婚する場合もある。今回の調査対象者の中では、アイヌ女性と和人男性のカップルから離婚が生じやすい傾向が見られた。アイヌであることが離婚の理由かどうかは必ずしも明確ではないことが多いが、実際に、民族性が離婚の直接の原因になった事例もあった。

第6章では、和人妻と和人夫を対象にして、アイヌ社会における和人のアイヌ性について検討した。

和人配偶者とアイヌの人々との婚姻は、アイヌの人々と地理的に近いところで暮らした経験を持ち、教育水準や就労状況がアイヌの人々と共通していることにより促される傾向が見られた。直接的には、仕事を通じた出会いや学校の同級生との再会によりつきあいが深まったケースが多かった。

和人がアイヌの人々と結婚するにあたり、アイヌ側の家族からは歓迎されることはあっても反対されることはなかった。しかし、和人配偶者側の家族からは反対されることがあった。差別と偏見がその背後にあった。

アイヌの人々と結婚した和人配偶者たちは子育てを通じてアイヌ社会と向き合うようになることが多い。それは、子どもに対してアイヌの血筋を告知するときであり、教育資金の援助を求めてウタリ協会（アイヌ協会）へ加入するときである。そして、子どもの将来について語るときにもアイヌ社会と向き合わなければならなかった。

アイヌ社会に向き合う中で、自らがアイヌ社会においては和人として退けられ、和人社会においてはアイヌ側の人間として退けられる、いわばダブル・アウトサイダーとして自覚せざるをえない場合もあった。ダブル・アウトサイダーとしての意識をもちがちなのは、和人妻であった。だが、同時に、和人妻は「和人としての視点」に加えて「アイヌとしての視点」をもつことも少なくなかった。

これに対し、和人夫はダブル・アウトサイダーとしての意識をもつこともなく、アイヌとしての視点をもつことはなかった。このことは、同じ和人配偶者でもアイヌの人々との結婚の意味は、ジェンダーにより異なっていることを物語っている。

### 第3節 アイデンティティの形成と差別

第3部では、アイヌ性に関わるアイデンティティの形成と差別について検討を加えた。

第7章では、アイヌの人々の生活史に刻まれた差別の実像を明らかにした。

アイヌの人々にとって、ライフコース上で差別が起きやすいのは、一つ目に学校生活の場、二つ目に結婚に際して、三つ目に就職の際や職場が挙げられる。この中でも、小中学校でのいじめは多くの人々に普遍的な経験となっている。

差別には男女によって異なる様相もみられた。アイヌの男性よりも、女性にとって身体的な特徴は切実な悩みであり、いじめの要因になりやすかった。結婚を考えた時に、アイヌの女性側が

その特徴をコンプレックスと感じ男性に臆病になってしまう様子も見られた。一方、アイヌの男性のうち、アイヌ女性ではなく和人と結婚したいという結婚観をもつ人も存在した。つまり、アイヌ女性であることは、和人からもアイヌ男性からも差別的なまなざしを向けられる可能性があった。

アイヌ差別の中でも、アイヌと朝鮮人とのハーフの場合は、純粋なアイヌ以上の差別を被ってきたという実態があった。朝鮮人も差別される存在であり、差別される者同士の間にも生まれた子どもがより強く差別のまなざしを向けられた。こうした事実には、アイヌ女性にとって和人との結婚が必ずしも容易ではなかったことも関係している。

しかし、人生で被ってきた差別の経験や、それによって培われた差別観には世代によって違いがあることが明らかとなった。現在では差別経験をふまえ、アイヌであることに対してマイナス・イメージを持ちがちな上の世代とは異なり、アイヌ民族としての血を誇りに思う若い世代が現れるようになっている。

第8章では、アイヌ社会における差別について、検討した。

差別は、アイヌ社会の内部にもたしかに存在した。実際、アイヌ社会には、被害者の視点で語られる差別と加害者の視点で語られる差別があった。

被害者の視点で語られる差別として、アイヌ民族の内部における「階層的な差異」を原因とした差別、アイヌとしての「血の濃さによる差別」、そして、結婚や養子を通じてアイヌ社会に入った「和人に対する差別」や「よそのもの」全般に対する「アイヌ社会の閉鎖性」にもとづく差別が存在した。

一方、加害者の側の視点に着目すると、多くのアイヌの人々によって「アイヌ性の隠蔽」が行われており、それが結果的に他のアイヌに対する差別を傍観・黙認することにつながったという事例が見られた。その背景には、アイヌに対する偏見や「否定的なイメージ」がアイヌの人々自身の中に存在しているという事実があった。さらに、アイヌに対する否定的イメージを肯定したうえで、アイヌの人々が置かれている経済状況の悪さ、あるいはアイヌ民族内の階層的な差異の原因を、個人の態度や能力に結びつけるような見方、つまり「自己責任論」も存在した。

加害者の視点で挙げられた事例は、いずれも現状を追認し、差別を肯定してしまう危険性をはらんでいる。そのため、アイヌに対する偏見や差別をなくすためにも、多様なアイヌの人々がいることに配慮し、よりオープンな環境のもとで地位向上にむけた運動を進めていく必要がある。

第9章では、アイヌとしてのアイデンティティの形成と変容について検討した。

その結果、アイヌとしてのアイデンティティは現時点多様な内実をもっていることが明らかになった。

しかし、それらの意識は、固定的なものではなく、アイヌであることに対して「否定的」な意識から「肯定的」な方向へ変化を遂げていた。その背後に、アイヌに対する社会の認識の変化があった。時代とともに、差別と偏見に満ちた社会の意識が徐々に改善され、理解のある身近な和人との出会いが生まれる機会が増大した。さらに、アイヌの伝統文化の価値が見直されていくことによって、改めてアイヌ文化活動・アイヌ関係団体に参加・関与する機会をえることができるようになった。理解ある人との出会いとアイヌ文化活動・アイヌ関係団体への参加によって、自らのアイヌとしての意識が「肯定的」な方向で変化した者が少なくなかった。

そのうえ、現在、アイヌ文化を実践していない人たちであっても、将来、アイヌ文化を実践し

たいと考えている人たちが少なからず存在した。そこには、アイヌとして「肯定的」な意識をもつ人が将来増加していく可能性が見いだせた。

だが、同時に、将来のアイヌ文化への興味・関心が、アイヌであることに対する「肯定的」な意識の形成につながらず、アイヌでも和人もない立場で、アイヌ文化を享受したいと考える人たちが、青年層を中心に現れつつあった。アイヌとしてのアイデンティティのゆくえは、ここで明らかになった可能性がどのように実現されていくのかによって、決まっていくことになる。

第10章では、エスニックな社会運動への参加と意識について、検討した。

「アイヌ協会」（かつてはウタリ協会）への参加は、アイヌの人々の生活向上に関して経済的な側面で大きな意味をもっていた。とりわけ、教育に関する事業のメリットがアイヌの人々にとって大きく認識されていた。それは、アイヌ協会が国や北海道が推進する「アイヌの人たちの生活向上に関する推進方策」の具体的事業の窓口として位置づけられているからである。

協会への参加は、同時に、アイヌ文化への接触という側面に関しても大きな意味をもっていた。それは、「文化活動」や「祭祀活動」などの文化を「学習」し、そのことを通してアイヌ文化を「復興」するという形で現れていた。

その場合、協会の事業に中心的に関与したり事業の担い手として関与するのは50代以上の男性に偏り、文化的な関与に関しても、「祭祀活動」は50代以上の男性、それ以外の文化活動は40代以上の女性が担うという偏りが見られた。性別と年齢により、協会への関わり方は明らかに異なっていた。

そのうえ、「アイヌ協会」の事業に対して、懐疑的な意見を表明する者もいた。教育に関する援助事業に複雑な印象を抱え、制度そのものを活用しない者がいた。「アイヌ協会」という組織自体そのものについても不満や不信が存在していた。それは、情報や利益が一部の者にしか行き渡っていないという現実や会計上の不正に関するものであった。

今後は、そうした現状と課題を直視し、改善の方法を検討しながら、「アイヌ協会」が担う（べき）事業を推進していく必要があるといえよう。

#### 第4節 生活・意識の変化と多様化の背景

以上のように、アイヌの人々の生活と意識は、大きく変化し、多様性を増大させてきた。その変化や多様性は、すでに述べたように、世代の違いを基本とし、性別、地域の違いなどが絡みあって生み出されてきた。同時に、それは、老年世代や壮年世代の人たち自身の生活や意識が変化することによって生じてきたものでもある。

その場合、これらの現実、アイヌの人々をめぐる社会環境の変化を背景にして生み出されていたと考える必要がある。とくに重要なことは、アイヌ文化振興法が制定され、それにとまってアイヌ文化の再生が進められてきたことのもつ意味である。

アイヌ文化振興法の制定に関しては、文化を振興するだけでは、生活の向上につながらないとの批判があったのも事実である。現在の「アイヌの人たちの生活向上」策でさえ不十分であり、歴史の中で奪われた先住民としての権利の回復こそが必要だとの主張もある<sup>1)</sup>。たしかに、アイヌ文化の振興や再生だけで、アイヌの人たちが直面している不平等や生活上の問題を解決することはできない。しかし、今回の調査結果からうかがいあがったのは、アイヌ文化に携わることを通して、

アイヌであることに対する負のイメージを払拭し、アイヌとしてのアイデンティティを肯定的に受けとめ直す人々が生み出されていたことである。一度忘れ去ったにもかかわらず、アイヌ文化振興法を根拠にして価値あるものとして位置づけ直された文化を学び直すことによって、自らのアイデンティティ自体を再生しつつある人々がいた。それは、アイヌ文化の担い手として自らの主体が（再）形成されていく過程である。そして、その主体のあり方は、文化だけにとどまらず、自らの社会的な立場を向上させるうえで重要な担い手を生み出す可能性をはらんでいる。それだけ、アイヌ文化の振興や再生は、大きな意味をもっているといえる。

アイヌ文化の価値が見直されることは、アイヌの人々自身の中に変化をもたらすだけではない。今回の調査の範囲をこえるが、和人自身のアイヌに対するイメージを変化させることにもつながると考えてもよい。本調査研究はアイヌの人々を対象にしたものであり、この点については、今後の課題とせざるをえない。だが、今回の調査結果の中からも、この予測を可能にする事実が見いだされた。それは、現在アイヌ文化を実践していない人も含めて、世代、男女、地域、さらには血統のちがいかかわらず、多くの人たちがアイヌ文化に興味・関心をもち、将来は体験してみたいという感想をもっていた。

その中で特徴的だったのは、将来はアイヌとして生きていくつもりはないにもかかわらず、アイヌ文化に興味や関心を示す青年層の姿であった。そこにあるのは、アイヌであるから、価値が見直されたアイヌ文化にふれたいのではなく、興味や関心をそそるものだから、アイヌとして生きていくつもりはなくても、アイヌ文化に将来触れてみたいという感覚である。それは、アイヌ文化の価値を知れば、アイヌ社会とは無縁の和人でさえ、興味や関心を持つ可能性があることを示している。アイヌ社会とはかかわりのない人々がアイヌ文化に対して興味や関心をもち、アイヌ文化にふれていけば、アイヌの人々に対するまなざしはかつてとは異なるものになるであろう。

このように考えると、アイヌ文化の再生とアイヌ文化振興法の意義を改めて考え直す必要があるといえる。アイヌの人々の生活向上につながるより効果的な施策を検討していくにあたって、この点を十分にふまえることが求められる。

今回、様々なアイヌの人々の生活史から浮き彫りになったのは、アイヌ文化の再生がもつ意義の大きさであった。

## おわりに

本報告書では、アイヌの人々の生活や意識、および血統、文化、アイデンティティなどのアイヌ性について、その現代的特徴を様々な側面から検討してきた。インタビュー調査によるデータであったため、量的調査では把握しきれない側面についても検討を加えることができた。その結果、いくつもの興味深い知見がえられた。

しかし、今回の分析は限られたデータをもとにしたものであることも事実である。今後、より多くのデータによって、ここで浮かび上がった特徴が、札幌やむかわだけでなく、アイヌの人々全体に当てはまるのかどうかを検討する必要がある。

われわれはすでに、2008年の大規模な量的調査で大量のデータを確保している<sup>2)</sup>。それらのデータには、質問や回答の深さや広がりには限界がある。しかし、今回の分析から得られた知見をもとに、2008年調査でえられた大量なデータを、新たな視点から再分析すれば、研究を前進させる上で、

少なからぬ意義があると思われる。

同時に、札幌やむかわ以外の地域を対象にした調査研究を行うことも重要である。アイヌの人々の生活や意識は、彼らが居住する地域によって異なる可能性があるからである。その際、今回の分析で深めきれなかった問題に対応するため、調査票や調査方法にも工夫が必要になるろう。

さらに、アイヌ以外の人たちが、現段階でアイヌの人々、アイヌ文化やアイヌ政策をどのように見ているのかを検討することも重要である。今回の分析で明らかになったように、アイヌの人々の生活や意識の変化は、彼らをめぐる社会環境の変化に左右されることが多いからである。

以上、これらの諸点が今後の課題として残されたことを確認し、本報告のまとめとする。

#### 注

- 1) この点については、とりあえず、阿部（2004）および中村（2007）を参照されたい。
- 2) 2008年調査の結果については、すでに報告書（日本語版と英語版）をまとめているので、参照されたい（小内編 2009、Onai ed. 2011）。

#### 参考文献

- 阿部ユボ, 2004, 「アイヌ民族の復権運動」上村英明監修、藤岡美恵子・中野憲志編『グローバル時代の先住民族』法律文化社, 39-49.
- 中村康利, 2007, 「アイヌ民族の『見えない貧困』」『教育福祉研究』13, 39-48.
- 小内透編, 2009, 『北海道アイヌ民族生活実態調査報告 その1 現代アイヌの生活と意識——2008年北海道アイヌ民族生活実態調査報告書——』北海道大学アイヌ・先住民研究センター.
- Onai, T. ed., 2011, *Living Conditions and Consciousness of Present-day Ainu: Report on the 2008 Hokkaido Ainu Living Conditions Survey* (Sapporo, Center for Ainu & Indigenous Studies, Hokkaido University).

(小内 透)